

万葉の旅(上)

— 大 和 —

犬 養 孝 著

現代教養文庫

481

社 会 思 想 社 刊

現代教養文庫

481

万葉の旅 (上)

——大 和——

犬 養 孝 著

社会思想社刊

著者略歴

1907年 東京都に生る

1932年 東京大学卒業

現在 大阪大学教授、文学博士

《著書》

「笠金村」「万葉の風土」他。

《現住所》

大阪市住吉区粉浜東の町3の84

現代教養文庫 481 万葉の旅 (上)

© 1964

昭和39年7月15日 初版第1刷発行

¥ 280

著者	犬養孝
発行者	土屋実
本文印刷	三松堂印刷株式会社
カラー印刷	株式会社 松栄堂印刷所
写真製版	株式会社 高木写真製版所
製本	株式会社 横田製本

発行所 株式会社 社会思想社

東京都千代田区神田駿河台 3-5

電話 代表 (201) 2067-8・9646

振替 東京 7 1 8 1 2

落丁乱丁は直接小社にお送り
下さればお取替いたします

担当 星野 和央
河村 忠雄

万葉の旅（上）

目

次

はしがき.....九

大和のはじめに.....二

万葉風土の展望(一).....三

初瀬・桜井
三

泊瀬朝倉宮.....四

隠口の初瀬.....六

初瀬川.....六

忍坂の山.....三〇

鏡王女墓.....三

倉橋川.....四

倉橋山.....三

山の辺の道
三

三輪山.....四〇

海石榴市.....三

三輪の神杉.....四

大和三山.....四

山の辺の道.....四

三輪の松原.....五

穴師の山.....五

巻向の川音.....五

弓月が嶽.....五

引手の山.....五

石上布留.....六

布留川.....六

人麻呂塚.....六

飛鳥・藤原京
六

劔の池	七〇
輕	七三
桧隈川	七四
桧隈大内陵	七五
文武天皇陵	八〇
川原寺	八三
橘寺	八四
明日香川	八六
島の宮	八八
南淵山	九〇
細川	九三
真神の原	九四
飛鳥古都	九六
大原	九八
高家	一〇〇
飛鳥浄御原宮	一〇三
雷丘	一〇四
行き廻る丘	一〇六

甘樫岡より(一)	一〇八
甘樫岡より(二)	一一〇
天の香久山	一一三
磐余の池	一二四
埴安の池	一二六
哭沢の神社	一二八
耳成の池	一三〇
藤原宮	一三三
春過ぎて	一三四
この瑞山	一三六
真弓の岡	一三八
佐田の岡	一四〇
越智野	一四三
齐明天皇陵	一四四
吉隠	一三八
墨坂	一四〇

宇陀

真木立つ荒山道……………一四三

安騎野(一)……………一四六

安騎野(二)……………一四八

葛城・宇智

一五〇

二上山……………一五三

馬酔木……………一五五

大津皇子墓……………一五八

葛城山……………一六〇

巨勢山……………一六二

宇智の大野……………一六三

浮田の社……………一六五

まつち山……………一六六

吉野

一六八

六田の淀……………一七三

吉野行……………一七五

宮滝……………一七六

三船の山……………一八〇

象山……………一八三

象の小川……………一八四

夢のわだ……………一八六

滝の河内……………一八八

なつみの川……………一九〇

平野南部

一九二

竹田の庄……………一九四

三宅の原……………一九六

曾我川……………一九八

雲梯の社……………二〇〇

百濟野……………二〇二

城の上の墓……………二〇四

奈良

二〇六

平城宮……………二一〇

奈良の大路……………二一四

東の市	二六
春日山	二六
春日野	二〇
よしき川	二三
三笠山	二四
能登川	二六
高門山	二六
田原西陵	二〇
佐保川	二三
佐保山	二四
佐紀山	二六
磐姫陵	二六

奈良山	二四〇
寧楽の手向	二四三
菅原の里	二四四
勝間田の池	二四六
生駒・竜田 二四六	
生駒山	二五三
暗峠	二五四
竜田山	二五五
竜田彦	二五八
小鞍の嶺	二六〇

万葉全地名の解説	三三
凡例	三四
大和万葉歌所出地名分布の表	三五
参考文献目録	三八
万葉集とその歌風	三三
万葉の諸歌人	三六
万葉の時代区分略表	三六
系図	三七
大和のおわりに	三〇
写真目録	三二

は し が き

わたくしたちは、時代をはなれて生きられないように、風土からもはなれることはできない。万葉の歌にしても同じで、より正しい、より生きた理解のためには、あたうかぎり時代をむかしにひきもどして見ると同時に、歌の生まれた風土におきなおして見なければならぬ。万葉の風土は、大和を中心としてほとんど日本全国におよんでいる。しかも万葉の故地は、古美術や古社寺のように目に見える人間の造作物をなにものこしていない。あるものは山河・草木・江海、あるいは、近ごろのように人為的に形をかえてゆく景觀である。目に見えないだけに、かえって生き生きと、そこに定着している古代の心をよみがえらせることができる。

わたくしは万葉の故地にどれほど脚をはこんだかわからない。雨の日に、雪に、快晴に、時に応じて趣きを異にした姿を見せてくれる。それぞれの歴史社会的な条件を背負った作者が、異なった風土におかれてかもし抒情のあり方は、ゆくたびに新たな理解をもたしらしてくれるようである。万葉の歌がどれほど深々と風土のなかに息づいているかをしめじみ思うのである。

万葉の故地のなかには、人為的に破壊され消滅に瀕しているところもあるし、利用されてかえって破壊に向かっているところもある。それに、日ごとになちまてゆく近代の距離感とは、人馬の歩行か人力の小船による以外に旅のできなかった日の、古代の抒情を体感しにくくさせている。事実、田舎道でさえ歩く人はなくなったし、峠はどこも草ぼうぼうである。万葉故地の実状は、いま明らかにしておかないかぎり、風土とからみあう抒情の実相さえ還元しにくく

なるのではなからうか。それでもまだ、川瀬の音、岸うつ波は変わらないし、尾花散る田や磯廻する海鵜の群は変わらない。古代の抒情はまだまだ千古のひびきをひそませている。

この「万葉の旅」には、上巻に大和一国、中巻に大和周辺諸国・東海・東国、下巻に山陽・四国・九州・山陰・北陸をおさめた。わたくしは読者のみなさまといっしょに万葉全国の旅に旅立とうと思う。万葉の旅が、たんに懐古であったり、見学であったりするならば、読者のみなさまも魅力を失なわれることであらう。一見、目には見えないが、わたくしたちの日本のことばで造形された古代の抒情が、時代と風土とのからみあいのなかで、野に山に海にいまもいきづいている実相をたしかめ得て、あらたなる生の糧として清新によみがえり得るところに意味があるのではなからうか。

本書の後半には、各巻とも、万葉集に出る全地名の簡単な解説と、その地名の出る歌の国歌大観の番号をすべてかかげた。下巻には万葉全地名の総索引を付した。その他の参考とともに、旅を終えて、万葉の風土への、そしてまた万葉集への、理解と親しみを深めていただければ幸いである。本書の写真はすべてわたくしの知友・学生の皆さんのご協力による。原稿の浄書・校正・索引の整理もまた同じである。出版社の諸氏には一方ならぬお世話になった。「万葉の旅」三巻をまとめ得たことに無上の喜びを感じていることを記して、ご協力の方々への謝意に代えたい。

昭和三九年八月

犬養 孝

上巻 大和のはじめに

万葉集に出てくる地名は、なんといっても大和がいちばん多いから、大和だけで一卷にまゐめた。所在のはっきりしないところもあるから正確な数は出せないが、題詞・歌・左註などすべてを延べて地名をかぞえれば大和だけで約九〇〇になる。大和はもちろんいまの奈良県だが近年は市町村合併がはげしく、その区画もずいぶんと変わっている。万葉などの場合には旧制の方がわかりやすい点も多いが、まぎらわしくなるので、本書ではすべて新制により、よみにくい地名にはなるべくルビをつけた。万葉所出の地名では奈良市が最高で約二五〇（延べて以下同じ）、ついで高市郡明日香村と吉野郡がそれぞれ約一三五、桜井市と磯城郡と橿原市とが七〇前後となる。旅の本文の地方別は、なるべく接近した区域と時代との両方を考えあわせながら、初瀬・桜井・山の辺の道・飛鳥・藤原京・飛鳥西方部・宇陀・葛城宇智・吉野・平野南部・奈良・生駒・竜田の一一地方にわけた。順次、書物による旅をつづけていたらいたら幸いである。

実地に旅する場合には、時間をかければきりのないところだが、おおよそはこの地方別によって歩かれたらよい。だいたい一つずつまとまった地方になっているが、二上山方面と巨勢・まつち山（葛城宇智）、奈良東郊と北郊（奈良）、生駒方面と竜田山（生駒竜田）などはわけなければならぬ。また全地名の解説によって適宜プランが立てられる。旅はなるべく歩くにこしたことはない。本文に関するかぎり地図は全部掲載してある。

なお、万葉の歌と主題のわきの作者名のふりがなは、もとのかなづかいにしてある。

万葉風土の展望 (一)

一

万葉集二〇巻の中には四五〇〇余首の歌がある。その中で地名の出てくる数は、歌の題詞・歌・その左註などをこめて、全部延べてかぞえたと約二九〇〇ほどの多数である。これを「三笠山」「三笠の山」のように同じ場所でも呼び方のちがうものは別々にして、同じ呼び名の地名をすべて一つとしてかぞえれば、約一二〇〇余となる。このようにたくさんの方の地名が万葉集の中にあるということは、万葉集がそれだけ広い風土的地盤に結びついていることの証拠でもある。

もともと、歌の中の地名は、歌としての美の構造にかかわるものであり、その上、万葉集は後の時代の歌集にくらべて、実地の風土と生活的にまた体験的にかかわりあう場合がたいへん多いから、その地理についての調査の必要なことはいうまでもない。万葉集の地理の研究は、むかしの歌枕名寄の類からはじめて、近世の鹿持雅澄の「万葉名処考」などの解説を経て、昭和の初年ごろからは、実地踏査にもとづく研究がすこぶるさかんになって、こんにちにいたっている。

しかし、地理の研究が深められるとともに、歌としてその心情をあらわす美の構造に、地名やその実地の風土がどうかかわっているか、歌としての造形を成り立たせるその関連のあり方

が考えられなければならない。これは、歴史社会的なかわりあいとも深くからみあうものであって、これらを通して、作家の資質や、時代によるかわりあいがいもわかってくるし、万葉美の本質も明らかに becoming くる。

万葉の故地は、美作・伯耆・隠岐・出羽および北海道をのぞいて、ほとんど全国にわたっており、万葉の歌は、まさに全国の風土的地盤の上に立ってひらいた古代人間の抒情の花ともいふことができる。わたくしたちは、歌をできるかぎりこれらの風土的地盤にひきもどし、時代をむかしにもどして、言葉による歌の造形の、構造の上の関連を明らかにしなければならぬ。こうしてはじめて万葉の歌が、書物としての万葉集からひとたび解きはなれて、全国各地の風土とむすびついた生き生きとした生態をとりもどしてくるのではなからうか。

二

万葉の故地を、それぞれの地理風土にもどしてわけてみると、およそ六つのかたまりと、三つのつながりとにまとめられる。

第一は大和（奈良県）のひとつかたまりで、地名はおよそ三〇〇（同じ呼び名の地名は一回としてかぞえる。以下同じ。）をかぞえる。総地名数一二〇〇の四分の一にあたる多数である。大和は大和朝廷出発の地であるし、万葉の全期にわたって飛鳥・藤原・平城と律令国家の建設・発展・爛熟を通じての帝都の所在地であるから、これだけのあつまりを見るのは当然である。それに他の地方は、多かれすくなかれ、この中央の影響下にあるもので、大和が源泉となつて、他の地方のかたまりの風土

